## 「イーハトーブ・プロジェクト in 京都」とは

東日本大震災からまもないある日、京都在住の宮沢賢治愛好者や賢治に所縁のある者が、たまたま思いを語りあう機会がありました。被災地から離れた京都にいて、いったい自分たちに何ができるのか…。想像を絶する事態に、それまではただ「オロオロアルキ…」という状態だった私たちでしたが、悩んでいるよりまずは賢治の作品を囲んで、人々が顔を合わせられる「場」を作ろうということになり、とりあえず4月に町家二階のイベントスペースで開いたのが、「第1回イーハトーブ・プロジェクト in 京都」でした。

それ以来、私たちはこのプロジェクトとして6回の公演を行ってきました。賢治作品の様々な形での朗読、彼の歌曲を集めたコンサート、賢治作品をもとにした創作能などを上演し、幸いなことに毎回たくさんの皆様にお越しいただいて、お寄せ下さった参加費の大半を義援金として被災地に届けることができました。

ところで震災以降、宮沢賢治の行動や思想は各方面からの注目を集め、ちょっとした賢治ブームも起きました。しかし以前から賢治に親しんできた者としては、これを一時の流行に終わらせるには忍びません。彼が遺した作品、彼が抱えていた苦悩を、今こそ地道に辿りなおすことによって、これから先も被災地とともに歩む長い道のりの糧を、多くの皆様とともに汲みとっていきたいと考えています。

## 震災と喪失

4年前の震災・津波による死者・行方不明者・震災関連死の総数は、2015年7月の時点で、21,797名に上っています。この一人一人が、私たちと関わりのある誰かにとって、皆かけがえのない存在でした。そしてこれらの方々は、もう二度と戻ってきてはくれません。

はたして私たちは、このはかり知れない「喪失」に、いったいどうやって向き合えばよいのでしょうか。いったいどうすれば、このような事態を、自分の心に受けとめることができるのでしょうか。

## 「グリーフ・ワーク」という道程

人は、かけがえのない存在を失った時、否応なく「悲嘆」の中に投げ込まれます。あの人がいなければ、自分はもう生きていてもしょうがない。この苦しみは、永遠に続くだろう。こんな苦痛と孤独を抱えて生きるくらいなら、死んだ方がましだ…。人はしばしば、大切な人との死別の後に、このような思いにとらわれます。そして実際その人の生活は、ある種の闇に閉ざされてしまったようにも見えます。

その闇の中で、人は苦しみもがいたり、怒りをぶつけたり、絶望したりもするでしょう。死者のことばかりを思い、はてしない自問自答を繰り返すこともあるでしょう。それでもしかし、一定の時間が経つうちに、そのような苦しみを続ける人の心にも、何かの変化が現れてくることがあります。悲しみは消えなくても、また自分は生きていこうと思うかもしれません。その人の死を、何か自分なりに意味づけていくかもしれません。亡くなった人が、自分に力を与えてくれているように感じるかもしれません。

このように、人が死別の苦難を受けとめ昇華する過程で、その人の心が自ずと行っていく営みのことを、「グリーフ・ワーク(悲嘆の作業)」と呼びます。その形は様々ですが、多くの人は、このプロセスを通り抜けることによって、悲しみの中からまた歩き出すのです。

## 宮沢賢治と「グリーフ・ワーク」

思えば、宮沢賢治という人も、若くして深刻な死別を体験した人でした。彼は26歳の時に、最愛の妹トシを、結核で亡くしたのです。人並み外れた感受性の持ち主だった賢治にとって、これは耐えがたい出来事でした。打ちのめされ、悲嘆に暮れ、悩み苦しむ日々は延々と続き、翌年には妹に会いたい一心で、樺太まで一人で行ってしまったほどです。一時は精神の平衡さえ崩しかねなかった賢治ですが、この苦しみの過程において、有名な「永訣の朝」をはじめ、日本近代文学で比類のない挽歌群が生み出されました。

そしてそのようなプロセスの後、彼はいつしか悲しみを越えて、心の安定を取り戻していったのです。すなわち、この間に書かれた数々の作品は、宮沢賢治という人が図らずも行った、稀有な「グリーフ・ワーク」の記録でもあるのです。

当日は、大正11年11月27日に亡くなったトシの命日の、2日後にあたります。賢治がトシを謳った作品を、竹崎利信さんの「かたり」で聴きながら、彼がいかにして深い「喪失」を乗り越えていったのか、その心の軌跡を辿ってみたいと思います。

「イーハトーブ・プロジェクト in 京都」実行委員会　浜垣 誠司

## 出演者

**竹崎 利信（たけざき としのぶ）**

役者・かたり師。劇団 troupe OCTOBER'S（トゥループオクトーバーズ）所属。ひとりがたり『物語の扉』、『新獨木舟（まるきぶね）文学館』、『きいて・みて宮沢賢治』主宰。

19歳から舞台俳優として様々な舞台に出演してきたが、2001年、近代現代の日本文学を中心に「かたり」の可能性を模索し、『獨木舟文学館』を開始。以後一人芝居、一人語りを中心に活動を続けている。

2012年の「第3回イーハトーブ・プロジェクト in 京都」では、「なめとこ山の熊」などを演じて好評を博した。

**浜垣 誠司（はまがき せいじ）**

宮沢賢治愛好家。精神科医。1999年からWebサイト「宮澤賢治の詩の世界（http://www.ihatov.cc/）」を制作し、賢治の詩のデジタルアーカイブ化、歌曲のDTM化、作品に関する考察などを行う。

2008年、同サイトにより岩手県花巻市から宮沢賢治賞奨励賞受賞。

## 会場

**京都府庁旧本館**は、明治37年に建てられた国の重要文化財です。

その二階の**正庁**は、公式行事や公賓接遇のための特別な部屋でした。

当日は構内に駐車場はありませんので、公共交通機関等でお越し下さい。

- 地下鉄なら、烏丸線「丸太町」駅下車、徒歩10分。
- 市バスなら、京阪「三条」から10系統、または京阪「神宮丸太町」から93系統、202系統、204系統にて、「府庁前」下車、徒歩5分。

**当日は日曜で正門は閉まっていますので、東門からお入り下さい。**

会場の定員は90名です。**来場ご希望の方は、必ず事前に下記に電話でご予約下さい。**

**075-256-3759**（アートステージ567：12時～18時，月曜休）

**主催：「イーハトーブ・プロジェクト in 京都」実行委員会**